
GUNNERS・STORY

雷電

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GUNNERS・STORY

【Nコード】

N7665K

【作者名】

雷電

【あらすじ】

『変異能力者』、彼らは『イレギュラー』と言われる者。普通の人間には理解することができない能力を持っている。人々はそんな彼らを恐れ、時には迫害し、嫌った。

イヴァントルカシア連邦。この世界にある大陸の名前だ。そこでは数多くの国々がお互いに助け合い、時には搾取しあつて平和を築いていた。しかし、平和などいつ何のきっかけで崩壊するか分からない。それを危惧したイヴァントルカシア連邦政府は、国の境界に関係なく活動することができる軍隊を建設した。それが連邦三

大軍勢力といわれる、連邦空軍、連邦海軍、連邦陸軍だった。

その中の連邦空軍、通称『ガンナー協会』では最近起こり始めたテロ事件に対して作戦行動を取ろうと各主要都市に部隊を派遣したのだが

第一章・プロローグ

イレギュラー、それは全てを否定するもの。

イレギュラー、それは全てが通用しないもの。

イレギュラー、それは全てを無に返すもの。

イレギュラー、それは全てに嫌われるもの。

イレギュラー、それは全ての根本を成すもの。

イレギュラー、それは全てが愛おしいもの。

イレギュラー、それは全てに好かれるもの。

イレギュラー、それは全てを救うもの。

イレギュラー、それは全てを生み出すもの。

イレギュラー、それは全て。

イレギュラー、それが、貴方の答え。

「ねえ、今の何？」

今のかい？今はね

「へえ、すごいんだね！僕にもできるかなあ」

できるとも、ほら君の手を見てごらん。

「手？」

そうさ、ほら私と同じ『印』をあるじゃない。

「これ？これは違うよお。昔からあるけど、これがあるせいでよくイジメられるんだ・・・」

でもそれはね、とても大切なものなんだよ。

「大切なもの？」

そう、大切にしなさい。きっと良いことがあるから。

「本当？」

本当だよ。その時が来ればきっと、きっと

第二章・ガンナー協会

イヴァントルカシア連邦。それは幾つもの国の集まり。

共和国、王国、公国、帝国・・・決して相容れないはずの隣国同士や遠方の国同士が一つの集合体として機能している。

何がきっかけでまとまったかなどは戯言でしかない。

どうして？でもなく、なぜ？でもない。

大事なのは連邦として機能しているという事実。ただ、それだけだ。

幾多の戦争を行い、幾多の紛争が行われ、幾多の命が散って今に至った。

ただ、それだけだ。

お互いに協力し、時には搾取しあい、平和を徐々に築いていった。

そう、まるで一つの生命体であるように。

どこまでも続く広い草原。

その草原の中を道路が一本どこまでも伸びていた。
吹き抜ける一陣の風。

遠くには山々が聳えていた。

「んーっ！」

そんな中、一人の男性が背伸びをした。草原の中で少し盛り上がった場所、一本の木がその頂上に生えている。

その木に持たれるように背伸びをした男性が座り込んでいた。

「のどかだなあ・・・ここから眺める景色も最高だし」

青い服を着込み、白みがかった茶色の髪に青いキャスケットを被って眼鏡を掛けた男性は遠くの景色に視線を移した。

その視線の先にあつたのは雄大な山々・・・ではなく、その手前の『都市』だった。男性の居る場所から数十キロ離れているにも関わらず、天空高く聳え立つビルを中心に様々な建物が円を描くように建てられているのがはつきりと分かる。草原を突っ切る道路はその都市の中へと続いていた。のどかな高原のど真ん中に突如として現れる近代的な建物。そのギャップはその光景を目の当たりにしなければ分からないであろう不思議なものだった。

「ふーむ。やっぱりここが一番落ち着く」

そう言って男性が再び伸びをしようとした時、

ドゥルルルルルルルルルルツッ！！！！！！！！！！

脳天をつんざくほどの爆音が草原に響き渡った。驚いて体を起こし、周りを見渡した眼鏡の男性の眼に映りこんできたのは、先ほど眺めていた都市から一直線にこちらへと走ってくる一台のバイクだった。ゆうに千ccは超えているであろうそのバイクは、どう考えてもデカ過ぎる爆音を轟かせ草原の中の道を疾走している。さらにはそのバイクには運転者の他に二人の人影が見えていた。

「あのやるー、道路交通法違反っていう法律知ってんだろっなあ？
それどころかアンだけの騒音撒き散らしとして・・・絶対二許サネ
エ」

先ほどまでのんびりとしていたはずの眼鏡の男性は、立ち上がる

と拳を握り締め道路に向かって全力疾走していった。

「アニキイ、本当に大丈夫ですかい？」

「ああ、任しとけ。ここまでこりや追ってなんざやって来ねえよ」
草原を走るバイクの運転席に座ったゴツイ男がその後ろに？またヒョロつとした男の言葉に答えた。

「でも、強盗なんて流石ですぜアニキ」

さらにその後ろに？まっっている太めの男がゴツイ男に話しかけた。
「ああ、これでここから出ちまえばこっちのもんよ。俺の調べた情報によりや今なら外に抜けられるってもんよ。・・・あの壁を抜けてな」

ゴツイ男は視線を道路先からさらに向こう　山を越えた空に向けた。そこには薄っすらではあるが山の二倍近い壁のようなものが見える。それもよく見ればそれは左右にずっと続いており、ぐるっと一周して元の位置まで戻っている。つまりこの草原を囲んでいるのだ。

「見当違いはこのクソうるさいバイクを盗んじまったことだが、こいつも売っ払えば金になる！そうすりゃ俺達は晴れて自由の身だ！何にも縛られることなんてない！エンジョイした生活が俺達を待っているんだ！！」

「コイヤッホーイ！！」

エンジョイ！エンジョイ！とバイクの上ではしゃぐ男達、とその瞬間、

ズバンッ！

ゴツイ男は声の主を探すため首を左右に振った。

「お前のバイクの内部に打ち込まれたのは徹甲弾てっこうだんとってな。装甲を貫くために使用される銃弾の一つだ。さらにそいつには工夫がしてあってね、一枚でも装甲を貫けば弾頭がパツクリ割れて内部から特殊な燃料と水が飛び散る仕組みなんだ」

ザツザツと草を踏みしめる音がゴツイ男の背後から聞こえてくる。その音にゾワツ！と、ゴツイ男の背中に悪寒が走った。目の前でこちらを見ているヒョロい男と太めの男は目を見開き、口をパクパクさせている。

「その燃料はな、水に僅かでも触れると急激に温度を上げていくんだ。最高温度は三百度、そんな高温まで熱せられたその燃料の熱を受け取れば、発火点二百五十度前のガソリンなんて」

ゴツイ男の背後で草を踏みしめる音が止まった。そして決して自然界では出来ることの無い影が、自分に覆いかぶさるように目の前に伸びている。

「ドカンッ！だ」

ギギギツツという感じが合っているであろう、ゴツイ男はゆっくりと後ろを振り返った。そこには自分を見下ろす眼鏡の男性が佇んでいた。

「ひいひいひい！！！」

ゴツイ男は飛び跳ねると這いずるように二人の方へと下がっていった。

「おいおい、俺は化け物か何かか？でもまつ、これから下手すつと化け物になつちまうかもしんねえがな？」

そう言う眼鏡の男性は、バキバキ！と指を鳴らした。青い服、遠目から見ればそうだろうが、それは足の脛ほどまであるロングコートだった。前は開けたまま、腰の位置で抑えるように茶色のベルトで留めてあった。

すると今まで怯えていたヒョロい男が行き成り懐に手を突っ込み、何かを取り出した。

激痛に悶えながらもヒョロい男は意識を保っていた。

「いつ？もちろんお前が引き金を引く瞬間さ」

「そんなわけ・・・あるか・・・。あんな一瞬で」

「銃が抜ける訳がないってか？」

それに答えたのは目の前の眼鏡の男性ではなかった。また別の声、聞き覚えの無い声だった。

「こいつはな『六徳のガンナー』って言われてんだぜ？刹那よりも早く動くことの出来る銃使い。早撃ち勝負で俺はこいつが負けたところなんて見たことねえな」

その声は二人の男の真後ろから聞こえた。二人が同時に振り返るとそこにはまたも見覚えの無い男性が立っていた。眼鏡の男性と同じ色のジャケットとズボン、腰まで伸びる銀色の髪。唯一不自然なのは、その右目に嵌められた金色の機械だ。時計の内部が剥き出しになったようなそれはカッチ、カッチと秒針を刻む時のように動作している。

「やっと追いついた。俺はそこまで使い勝手のいい『能力』じゃねえから時間食っちゃまったぜ」

能力、その言葉を聞いた瞬間、男達は飛び上がった。

「ま、まさかお前『変異能』」

「あたりだデブー！」

四の五言わせねえ、という勢いで銀髪の男性は太めの男の顔面を掴んだ。

「な、何をする！？」

「ちよつと面白いことしてやるぜ・・・解析終了。分解！！」

銀髪の男性が叫んだ瞬間、太めの男はその場から消えた。まるで霧散するように一瞬の出来事だった。

「そ、そんな・・・」

その光景を見てゴツイ男は言葉を失った。人間がその場から消え

る、自分の知っている物理現象では到底説明出来ない事だった。

その時、ドンッ！と腹に響くような音がした。ゴツイ男がパツと音のした方向に顔を向けると、そこには今消えたばかりの太めの男が気を失つてのびていた。次から次へと起こる不思議な現象に、男の頭の中は既にパニック状態だった。

「な、何が起こっているんだ！？お、お前は誰なんだ！！」

「おいおい、散々追い掛け回していた相手の顔ぐらい見てないのかお前は？」

凶星だった。逃げるのに必死で追っ手の顔など見ている余裕などなかった。

「俺はガンナー協会所属ライズ・レスファンだ。一応『大佐』な？自分を捕まえに来た相手の名前ぐらい覚えとけ」

銀髪の男性、ライズは自分を親指で指しながらニヤツと笑った。

「ついでに言つとくと、お前の仲間の手を打ち抜いたそいつは」

「セイガ・クラント、同じガンナー協会所属の大佐だ。自分の名ぐらい自分で言える」

「わりいわりい、セイガ」

男の背後にいつの間にか移動していた眼鏡の男性、セイガはそう呟くと手に握った銃をゴツイ男の頭に突きつけた。

「俺のお気に入り入りの場所で爆音なんて巻き散らせやがって、ここが戦場ならこの瞬間引き金を引いているところだ」

ゴン、ゴンと銃口をゴツイ男の後頭部に打ち付けるセイガの目は洗練されたハンターの目、そのものだった。

「『変異能力者』どもめ・・・」

ゴツイ男がボソツと呟いた。

「何？」

「変異能力者があ！！人間の皮被った化け物め！！」

声を張り上げ、そう怒鳴るとゴツイ男はライズを睨み付けた。

「ああ、間違いない」

ライズはゴツイ男のその言葉を否定せず、尚且つ肯定した。

「俺達は普通の人間とは違う能力を持っている変異能力者だ。この腕の痣『メビウスの輪』と呼んでいるこいつが俺達、変異能力者の証だ」

そう言つてライズは服の袖を捲つた。

そこには痣があつた。前から見れば二本の黒い線、しかしよく見ればその後ろで交差するように繋がっており、例えるなら大きな輪ゴムをひねつて腕に嵌めたような感じである。

「俺の能力は『原子制御』アトムオーケイター物質の原子を自由に分解、再構築することが出来る。さっきの奴も一度分解し、上空で再構築して落下させたんだよ」

さっきの音はその落下音だったのか。妙に納得してしまつたゴツイ男だったが、

「な、何にしたつてお前達化け物は人間じゃねえ!!!」

「その言い方はひどいですね」

まただ。またどこからか知らない声が聞こえてきた。

コイツみたいにもた一瞬で現れるんじゃないだろうか？

怯えた表情を隠し切れないゴツイ男は周りを見渡した。しかし、

目の前と背後に居る二人以外にも人影などなかった。

もしかして姿の見えない能力を使つているのではと考えたが、

「どこみてるんですか？」

目の前に女性がフワリと着地した瞬間、そんな考えは吹っ飛んだ。空から？空を飛んできたともいうのか!?

「そうですよ。空を飛んできたんです」

自分の考えが見透かされ、ゴツイ男はドキッ!とした。目の前に現れた女性は自分の前後にいる二人と同じ色の服を身につけていた。年は二十代前半か・自分の前後に居る二人と比べると一、二歳ほど低く見える。透き通る様な青色の髪と目を持ち、セイガの物によく似ているロングコートの前を全て留め、腰には工具が詰まりきつたウエストポーチが下げられている。頭の上には薄い黄色のベレー帽が乗っていた。

「ミスル君遅かったじゃないか。何か問題でも？」

ライズが空から降り立ったミスルの方に顔を向けて話しかけた。

「いえ、外壁警備隊に外壁の閉門と今日の開門の予定を取り消すよう連絡を入れてきました」

「ふむ、まあ仕方が無い。凶悪犯罪者の逃走防止のためだからな・
・ここにお前達がいるのは手違いなのか？」

再びゴツイ男に顔を向けると、ライズは同じ目線になるように屈み込み、顔を覗き込んだ。

「で、盗んだ現金は何処にある」

「・・・ない」

「はあ？協営銀行本部に直接強盗に入ったくせに、いまさら白を切るつもりか？」

目を細め、ゴツイ男を睨みつけるライズだったが、

「現金の入った鞆はさっきの爆発どつか飛んでつまったんだ」

「なに！？」

その言葉に思わず立ち上がった。そして視線をゆっくりと上げ、

「セイガくん？」

キツとセイガを睨みつけると同時、目線を外すセイガ。

「お前・・・どうするつもりだ！？現金取り戻さないねえと俺達減俸だぞ！減俸！」

「んなこと言っただって知らなかったもんは仕方ないだろう！」

「るせえ！なんとしてでも見つけないと！」

「あつ・・・もしかしてまだあのバイクの中に？」

「なんだと！？どうすんだよ絶体絶命じゃんか！！」

「いや、まだそうと決まった訳じゃ・・・」

「いや、お前のことだ現金乗ってんの知らなくてタンクに徹甲弾でも打ち込んだらう」

「・・・」

「図星か！？分かりやすい奴め。見つかなかったらお前のせいだからな」

「なんだって！？お前がもつと早く取り押さえていればこんな事はならなかつたんだろぅが！！」

「なんだと！！」

「やるかぁ！！」

「お二人さん」

「「ああ！？」」

バチバチと火花を散らせていがみ合う二人の顔が同時にミスルの方を向いた。そんな二人に指で、あっちと伝えるミスル。その方向に二人が顔を向けると 仲間を抱えてトングズラしようとしているゴツイ男の姿が合った。

「「あつ！！」」

いつの間にか二人の死角を縫って逃げ出していたらしい。必死になつて遠ざかろうとしている。

「ちつ！逃がすかよ」

「私に任せてください」

走り出そうとしたセイガを抑制し、ミスルがニツコリと笑いかけた。

「お、おう」

そんなミスルにセイガは素直に応じてしまった、なぜだか背中にゾワリと悪寒が走ったからだだった。その返答に頷くとミスルは逃げていく男達の方へ体を向け、

「重力開放・・・」

そう呟いて地面を蹴った。その瞬間、ミスルの体は数十メートル上空へと飛び上がった。普通の間人ではありえない脚力、それどころかミスルの体はフワフワと滞空しているように見える。

そして逃げてゆく男達の上空へと来ると、

「重力最大」

そう呟いた。その言葉がキーになるように滞空していたミスルの体が、ギューン！！という音と共に目に見えない速度で落下した。そして、

三人組みを捕縛部隊に引き渡した後、三人は『都市』の中に戻ってきていた。

「ったく、現金が見つかったから良いものを・・・下手すりゃ軍法会議ものだぞ？」

「だから、知らなかったんだっての！」

「どうだか、大方新作の徹甲弾試したかったんじゃないのか？」

「それは・・・ゴニョゴニョ」

「あつ、ごまかした。てめっ！やっぱり知ってても撃ってたんだろ！！」

「知ってたら撃たないよ・・・タンクはね」

「タンク以外なら撃つのかお前は!？」

「無論だ」

「お前え!!！」

「やるのかあ!!！」

「お二人さん」

「何だ!!！」

しばらくお待ちください

「おぶつ・・・みするくん。内蔵に直で・・・重力を掛けないでいただきたい・・・し、死んでしまう」

「右に同じ・・・」

道端に倒れたライズとセイガは呻き声を上げていた。

「まったく・・・お二方ともいい加減にしてください。そうでないと私も手加減忘れちゃいますよ？」

ゾツ！と背中に悪寒が走ったのはセイガとライズだけでは無い。

通りがかった人たちもブルブルと身をゆすっていた。

「さ、帰りましょう!!早くしないとレストラン閉まっちゃいますよ」

そう言ってミスルは二人に背を向けるとそそくさと歩いていってしまった。

「ま、待ってくれミスル君」

「お、俺を置いていくな！！セイガあ！！」

何とか立ち上がったセイガの足にライズがしがみ付く、そして引きずり倒す。また引き剥がして立ち上がったは、引きずり倒す。顎を蹴り上げて立ち上がるうとすれば、蹴った足の反対側を持たれて後頭部を道路に打ちつけ、お互いに唸って転げまわる。

そんな光景を少し遠くから見ていたミスルはクスクスと笑っていた。

「ほら、反重力かけてあげますからいきますよ」

そんな調子で三人は夕焼けの町へと消えていった。

ここは『都市』、いやイヴァントルカシア連邦の誇る陸海空三大軍事力の一角、『連邦空軍』。その名を『ガンナー協会』。ここから始まるのは連邦全てを巻き込んだ戦いの始終の記録である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7665k/>

GUNNERS・STORY

2010年10月9日07時30分発行